

人権なら

2025年4月1日

第172号

●ひと・まち・生き生き

NPO なら人権情報センター

石川一雄さん(86歳)が死去

「見えない手錠」を掛けられたまま無念の旅立ち

石川一雄さんが3月11日に亡くなった。86歳だった。くしくも61年前、1審で死刑判決が出た同じ日に旅立った。訃報は即、全国に伝わった。狭山闘争を闘ってきた人々は深い悲しみとともに無念さを噛みしめた。



23歳のとき、強盗殺人罪などで不当逮捕され、「自白」を強要された石川さん。1977年に無期懲役刑が確定し、服役。32年にわたる拘禁生活を強いられた。

全国の識字活動や部落解放運動に多大な貢献

その間、獄中で文字を学び、熱いアピールを支援者らに発し続けた。その姿は識字活動に携わる全国の非識字者を鼓舞した。狭山闘争を通して部落解放運動の大高揚にも貢献。多くの運動家を輩出させた。

狭山闘争は数々の冤罪事件の取り組み、市民運動、学生運動、労働運動にも大きな影響を与えた。司法のデタラメ、社会にある差別、不正も暴いた。石川さんは人間解放を求めるすべての運動の象徴だった。

奈良における部落解放運動を高揚させた狭山

奈良における部落解放運動も狭山闘争を柱にして大きく発展した。石川さんは何度も奈良に足を運んでくれた。同盟休校などの狭山闘争は、解放運動の象徴として人々の心に刻まれ、生き様となっていった。

第3次再審闘争は請求から19年。闘いは早智子さんに引き継がれ、今後も続く。再審闘争に絶対勝利し、石川さんに掛けられている「見えない手錠」を外し、霊前に再審無罪を報告し石川さんの無念を晴らしたい。

1年間、教え合いながら学習

2024年度かいほう塾が閉校。交流会で閉める

2024年度かいほう塾の閉校式と交流会が3月13日、三宅町あざさ苑であった＝写真。中学生10人とスタッフ5人が参加した。



今年のかいほう塾は中学生延べ503人が参加した。女子生徒が比較的多く、賑やかにおしゃべりをしながらも、お互いに教え合いながら学習するという良い雰囲気でも過ごしてきた。

塾には、式下中学校の先生もボランティア参加。生徒たちに寄り添い、学習を支えてくれた。

閉校式では、スタッフが1年間で感じたことを語り、生徒たちと塾の大切さを再確認。皆で頑張り抜いた今年度を締め括った。

互いに支え合う仲間になることが大きな目標

そのあと、交流会＝写真。チームに分かれ、「ボッチャ」をして遊んだ。普段することのないゲームに戸惑っていたが、すぐに楽しめることができ、盛り上がった。他のゲームも楽しむなど笑顔あふれる交流会となった。



かいほう塾は学習だけではなく、互いに支え合える仲間になることが大きな目標だ。生徒たちは、塾で互いに支え合うことの大切さを学び、仲間たちと学習をしながら、「生きる力」を身につけてきた。

いじめ、貧困、不登校など、生きづらさを抱えている中学生が多くいる。だからこそ、誰もがいつでも集える場所としての塾を、今後も、つないでいくことの必要性を強く感じている。

浄土寺・忍性フィールドワーク

忍性菩薩の生誕地でハンセン病問題を学ぶ

「浄土寺・忍性フィールドワーク」が3月15日にあった。元教員の福嶋明美さんが参加する「WESの会」（女性のエンパワーメントをサポートする会）が取り組んだ。三宅町屏風にある忍性生誕碑と浄土寺を訪問。元住職の藤田能宏さんから話を伺った＝写真。



藤田さんは、自身が「認知症」だとニコニコしながら話し、屏風で生まれた忍性菩薩の「十種大願」について解説。「三衣一鉢」「貧窮者を憐れむこと」「特定の檀那の別請をうけない」などを具体的に説明した。

また、ハンセン病の人たちと触れ合うことを忌み嫌わずに救済に携わった忍性菩薩の姿を生き生きと伝えた。浄土寺の「平和の鐘」（戦時下の供出を免れた）についても話し、鐘を突く体験をさせてもらった。

地域教材を使い、人権学習を進める式下中学

このあと、三宅のMiiMoに移動。式下中学教員の岡山優子さんの話を聞いた。岡山さんは地域教材を使う同校の人権学習の取り組みを報告した＝写真。

同校では、地元で生まれた忍性のことや、「ハンセン病」のことをほとんど知らずにきた。その反省の下、浄土寺や、ハンセン病回復者、支援センターの人たちとの出会いや交流を深めてきた。



同時に、地域教材作りを進め、16時間の集中授業を組んだ。昨年の夏休みには美術部・英語部の生徒たちと紙芝居「忍性さん～笑顔のお坊さん～」を制作した。秋には生徒らと呂久光明園を訪ね、上演。回復者たちと交流した。そのことが何よりもうれしかったと。

生徒たちの「眼差しや意識」が、こうした出会いと学びを通して変わることを実感。改めて学校でハンセン病問題を取り上げる意義を感じていると語った。

映画「35年目のラブレター」

奈良の西畑保さんをモデルにした実話を映画化

映画「35年目のラブレター」が今、全国で好評上映中だ。映画は西畑保さんと妻の餃子(きょうこ)さん夫妻の物語。1970年代と現在の奈良を舞台に夫妻の人生を綴っていく。

2人の晩年を笑福亭鶴瓶、原田知世が、若い時代を重岡大毅、上白石萌音が演じている。



読み書きできない西畑さんを妻が側で支える

西畑さんは1936年、和歌山県生まれ。山間部の炭焼き小屋で育った。小学校では貧しさゆえに教師と同級生から差別的扱いを受ける。2年生で学校に行かなくなる。10代前半から主に飲食店で働くが、読み書きができない。そのことで、苦労の連続を味わい、職場を転々とせざるを得なかった。

読み書きできないことは妻にも言えなかった。回覧板に自筆署名が必要になった。離婚覚悟で「字が書けない」と告白した。妻は「つらかったでしょ。もう苦しまんといてね」と。以来、西畑さんを側で支え続けた。

地域劇団「かいほう塾」も創作劇「60歳の…」

西畑さんは64歳になって奈良市立春日中学校夜間学級に通い始めた。若い頃、妻に約束したラブレターを書くためにだった。ラブレターは結婚35年目に書き上げた。感謝の言葉を述べ、これからもよろしく、と結んだ。だが、手渡す直前に妻は急逝した。

現在、「春日夜間中学校を育てる会」の会長を務め、夜間中学設立の意義を講演するため、全国を回る。

なら人権情報センターが事業委託を受けて毎秋、開催する「生き生き交流祭」。去年は、地域劇団「かいほう塾」が西畑さんがモデルの創作劇「君に伝えたいこと～60歳のラブレター～」を上演。西畑さんが観に来てくれた。大変喜ばれ、劇団メンバーは感激した。

差別の理由はあとから何とでも

石元清英さんが部落問題交流会で報告

部落問題全国交流会の事務局会議が3月16日、京都市内であった。石元清英さんが「何が部落になったのか」のテーマで報告した。

部落の定義は「いわゆる部落と見なされ…現にそう見なされている所」とする。「部落であると皆が思っている所が部落」というもの(原田伴彦著「入門部落の歴史」)。

同対審「全国基礎調査」(1963年)の対象地域は「一般に同和地区と考えられる地区」とする。多くの人々は「穢多」「非人」が住んでいた所が「部落」と考えていたようで、曖昧な定義という他ない。



「解放令」で「穢多非人等之称を廃し」たが…

「解放令」では、「穢多非人等之称を廃し」とある。「穢多・非人」と同じように忌避されていた藤内、鉢屋、長吏、夙、声聞師などの称が全国各地で廃される。

夙は10世紀ごろに京都・奈良の「乞食集団」として登場する。埋葬の役をし、14世紀ごろには神社の支配下で「浄め」「神人」の役を担う。戦国時代に神社の支配から逃れ、「浄め」をやめ、江戸時代に百姓身分となる。だが、周辺の百姓からは忌避された。

声聞師(産所非人)は芸能、猿牽、萬歳など、家々を回り、浄めをしていた。鉢叩は空也上人の流れを汲む念仏宗の宗教者。放浪しながら念仏踊りをしたり、お札を配り、布施を取り、低く見られていた。

石元さんは数多くの絵図を示しながら、こうした人たちも「解放令」の対象となったと説明した。

実際の改善対象は「近代スラム、貧民窟」だった

近代には、新平民、旧穢多という言葉が使われる。これらの人々は都市の木賃宿、長屋に流入する。伝

染病の流行、犯罪の増加で、貧民部落(貧民窟)が形成される。穢多村、近代スラム、非人小屋と混同され、貧民窟と言われるようになった。

20世紀には「特種部落」という言葉が登場する。内務省が1907年に部落改善対策に着手する際に「特種部落」を使用。「新平民、旧穢多村」とした。だが、実際は「近代スラム、貧民窟」が改善の対象だった。

部落の定義は「皆が思っている所が部落」だと

「特殊部落」という言葉は1910年に登場。それまで結婚の行き来をせず、「特殊な血筋」「血筋の違い」が基準となって、異質な存在として忌避してきた集落や地区に対して「特殊部落」というレッテルを貼るようになる。だが、貧民窟、近代スラムは切り離された。

結果的に「特殊部落」のレッテルを貼られた所が部落となった。だから、部落を定義しようとしても、色々なものが部落になっているため、厳密に定義できないのが実際だ。誰が部落民なのかは、部落内に住む人は属人的に理解。部落外の人々は属地的理解となる。

「部落民とみなされた人が部落民」ということ

近代になって流動化が進むと、部落外の人が入り、部落の人が出ていく。結局、部落の中の住民が全部部落民ではなく、属地的理解と属人的理解が乖離し、「血筋の違い」は部落差別の根拠ではなくなり、「部落民とみなされた人が部落民」とされる。

このように今日の部落差別の根拠は漠然とした異質感で、差別の理由はあとから何とでもつけられる、と締め括った。報告のあと、参加者で議論し合った。



「ぷあん展」みそら屋で開催!

ひまわりの家のハム・ソーセージ工房「ぷあん」の歴史や作り手「ぷあんの人たち」の紹介や、記念写真スポット「顔はめ」パネル etc・・・楽しい展示と企画展が～3月13日まで開催されました。「企画展」は、目が離せません!ぜひ、お立ち寄りください。

記念写真スポット「顔はめ」パネル etc・・・楽しい展示と企画展が～3月13日まで開催されました。「企画展」は、目が離せません!ぜひ、お立ち寄りください。

カンボジアからの風 <24>

生活拠点を日本に移し支援の輪の拡大めざす

待望のサンタピアップハウスは2023年12月に完成しました。以来、本格的な運用を始めてきました。昨年8月には、サンタピアップツアーを企画し、同ハウスを使って中身の濃い交流活動ができました。

さて、私は長年、カンボジアを生活拠点に活動を行ってきました。昨年度からは16年ぶりに日本に生活拠点を移し、活動を進めてきています。



というのは、15年経った今、色んな事が遠隔でも出来るようになり、現地の方に任せられることが増えたことも大きな理由の一つです。

サンタピアップハウスの完成で活動が豊かに

現地とは連絡を密に取りながら、日本での支援の輪をさらに広げるべく、今年、来年は活動をしていく予定です。もちろん、カンボジアにいる時期もありますの

編集後記 ★★★★★★★★★★★★

世界をGAFAMが席卷する。企業名の頭文字の総称で、Gはグーグル、Aはアマゾン、Fはフェイスブック(現メタ)、Aはアップル、Mはマイクロソフトだ。すべてが米国のテック企業。トランプ政権とは蜜月関係を築く。世界中から膨大な情報を集め、人々の生活に影響を及ぼす。誰もが使用するパソコンやスマホから様々な情報を収集する。私たちは無償で自らの行動情報を提供している。それが私たちを縛る。情報漏洩、プライバシー侵害も起きる。GAFAMは集めた莫大な情報データを基に色んな分野で支配力を強める。同時に巨額のマネーを稼ぎ、一握りの超富裕者が誕生する。情報機器を手放せない私たちは「農奴」と言われる存在に。どうすれば良いのか。難問だ。

で、現地からの情報もお届けできると思います。すでに来年度のツアーの問い合わせも来ています。開催有無も含め、未だ何も決まっていませんが…。

サンタピアップの運営については、会費や子どもたちが作ってくれたアクセサリーの売り上げ、寄付、民間助成金などで成り立っています。



会員になっていただいた方には通信などで活動の報告などをさせていただいております。サンタピアップでは、会員になっていただき、一緒に活動支えて下さる仲間を広く募集しております。ご協力、どうぞよろしくお願い致します。

会員になって就学・自立支援の活動を支えて

サンタピアップは2006年からカンボジアとタイの国境の町ポイレト郊外の村で貧困など問題を抱えている子どもたちの就学支援や村の人たちの自立支援、居場所づくり(同ハウス運営)、付近の公立小学校に安全な飲料水の配布などに取り組んでいる団体です。

■正会員:年会費12,000円(月額1,000円) ■賛助会員:一口3,000円 ■団体会員:一口20,000円。

郵便振替口座:(0)0900-7-329383 特定非営利活動法人サンタピアップ

振り込み用紙に会員区分、名前、住所の記入をお願い致します。振り込みの際、先頭の(0)を記入しない場合もあります。ご注意ください。最新情報は右のQRコードからアクセスしてください。



(NPO法人サンタピアップ代表・古川沙樹)

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/